

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一4:14～21 「私にならう者に」

[14]「私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです」

コリント人たちの誤解を避けるため、パウロはこのように真意を語る。それは愛する自分の子どもとしてさとすためであった。

[15]「たといあなたがたに、キリストにある養育係が一人あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです」

ここでパウロが言う「養育係」とは、コリントにいる自称教師、自称指導者たちのこと。彼らはコリント人たちを自分たちの支配下に置こうとしていた。パウロはコリントで福音伝道に苦闘し、キリスト・イエスにあって産みの苦しみをして苦勞の末に彼らを救いに導き、死と滅びに至る罪の生活からキリスト・イエスにある永遠のいのちへ、聖い豊かな生活へ、生まれさせた。その意味でパウロは自分を「父」と表現している。これは彼のコリント人に対する愛情からほとぼしり出たことばであろう。

[16]「ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください」
パウロはここで、キリストのしもべとして、又、福音に生きる者の生き証人、又、模範としての自分と同じようになってほしいとの願いを込めて、このように勧める。

[17]「そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう」
テモテはパウロが第2回伝道旅行の時、小アジアのルステラで導いた弟子。(使徒16:1～3)
テモテは常にパウロと行動を共にしており、コリントでの最初の伝道の時にも彼と共にいた。(使徒18章) 彼はコリント人にとっては信仰上の兄のような存在であったであろう。パウロが彼をコリントへ送った理由は、パウロの生き方を思い起こさせ、正しい信仰生活を送らせるためであった。

[18-20]「私があなたがたのところへ行くとはあるまいと、思い上がっている人たちがいます。しかし、主のみこころであれば、すぐにもあなたがたのところへ行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく、力を見せてもらいましょう。神の国はことばにはなく、力にあるのです」

パウロはわざとコリントへ行かないのではない。ただ今しばらくの間は、どうしてもエペソを離れられない。しかし、それを誤解して思い上がっている人々がいた。パウロはそれゆえ、主のみこころであれば、すぐにも行くと言う。そしてコリント教会の思い上がっている人々の口先だけのことばではなく、力を見せてもらおうと迫っている。キリスト教は空理空論ではなく、いのちあるもの、力あるものなのである。それゆえコリント人が福音のことばのとおりには生きていくという力ある信仰生活、クリスチャンとしての生活をしていないならば、彼らの本当の姿は張子の虎のようなものとなる。神の国は口先だけのことばではなく、力をとらう。→ヤコブ2:15～17、マタイ7:20～21

[21]「あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも愛と優しい心で行きましょうか」

「むち」とはこの場合、懲罰とか厳しい指導の意味。しかし分裂、不和、争いなどを悔い改め、一致して正しく信仰生活に励む場合には「愛と優しい心」である。そのどちらを取るかはコリント教会の人々が、いかに信じて、いかに行動するかにかかっている。私たちも日々の信仰生活をかえりみて、改めるところがあれば改め、悔い改めるべき所があれば悔い改めて、信仰の大先輩であり、模範者であるパウロの生き方に、習い学ばねばならない。